

令和3年
6月30日

病害虫発生予報 7月号

茨城県病害虫防除所

防護装備（マスク・保護メガネ・防護衣）をきちんと着用しましょう
～令和3年度茨城県農薬危害防止運動期間(6/15～9/14)～

< 目次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水稻：いもち病	1
【防除所レポート】BLASTAMによる葉いもちの感染好適条件の状況について	1
【防除所レポート】クモヘリカメムシの産卵開始時期の予測	2
○水稻早生品種の斑点米カメムシ類の発生に注意しましょう	2
ナシ：黒星病	3
ナシ：ナシヒメシンクイ（第三世代幼虫）	3
【防除所レポート】ナシヒメシンクイの防除適期の予測	4
果樹共通：チャバネアオカメムシ	4
夏ネギ：黒斑病（葉枯病を含む）	5
○水稻における紋枯病の防除対策について	5

【その他の病害虫】

水稻、サツマイモ、ナシ、ブドウ、夏ネギ、夏秋ナス、共通害虫	6
-------------------------------	---

II. 今月の気象予報 7

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの
「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。
茨城県病害虫防除所 Tel :0299-45-8200
予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。



<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>
フェロモントラップデータ随時更新中

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1. いもち病（葉いもち）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在、調査圃場の葉いもちの発病度¹⁾（本年値 0.1、平年値 0.1）および発生地点率（本年値 4%、平年値 4%）はともに平年並である。
- ② 葉いもちの感染好適条件（BLASTAM²⁾による）は、6月第4半旬に県内の広範囲で認められ、6月29日までの出現日数は平年並～やや多い（下記、防除所レポート参照）。
 - 1) 発病度：株ごとの発病程度をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。
 - 2) BLASTAM：アメダスデータを利用した葉いもちの発生予測プログラム。

[防除上注意すべき事項]

- ① 置苗は、いもち病の発生源となるため、現在水田に置苗がある場合には、水田およびその周辺に放置せず、持ち出して適切に処分をする。
- ② イネの葉色が濃い所や水口等を観察し、初発の確認に努め、発生初期に防除を実施する。
- ③ 例年、梅雨明けまでは発生が増加するため、現在発生がみられない水田でも注意する。
- ④ 粒剤およびジャンボ剤で防除する際は、効果が現れるまでに時間がかかるため使用時期に注意するとともに、湛水状態で薬剤を散布し、1週間は止水して湛水状態を保つ。
- ⑤ 殺菌剤を複数回使用する場合、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRACコードの異なる薬剤を選択する。

防除所レポート [BLASTAMによる葉いもちの感染好適条件の状況について]

- ① 葉いもちの感染好適条件（BLASTAM¹⁾による）は、6月第4半旬に県内の広範囲で認められ、6月29日までの出現日数は平年並～やや多い（表）。
- ② 葉いもちの発病は、感染好適条件が出現した日から7～10日後に始まると考えられる。曇雨天が続く等、発病の好適条件が見られる場合はいもち病の発生に注意する。
- ③ 各地点のBLASTAMによる葉いもちの感染好適条件の詳細については、病害虫防除所ホームページで情報を随時更新しているので参考にする。

1)BLASTAM：アメダスデータ4要素（気温、降水量、風速、日照）から、その日が葉いもちの感染に好適であったかを判定するプログラム。

表 BLASTAMによる葉いもちの感染好適条件の地域別の平均出現日数（6/1～6/29）

	県北	県央	鹿行	県南	県西
本年値	1.3	2.0	2.5	3.3	2.0
平年値	1.6	1.7	1.5	1.8	1.9

注) BLASTAMは、広域にいもち病が感染する時期を推定するシステムであり、特定地点の発生を予測するものではなく、周辺地点の感染好適条件の出現状況も併せて判断する。最寄りのアメダス地点で感染好適条件が出現していなくても、圃場によっては感染に好適な条件になっている場合もある。

防除所レポート [クモヘリカメムシの産卵開始時期の予測]

[クモヘリカメムシの産卵開始時期]

- ① クモヘリカメムシの有効積算温度から予測した今年の産卵開始時期は、平年並～やや遅いと予想される。

表 クモヘリカメムシの予測産卵開始時期¹⁾

	常陸大宮市	水戸市	笠間市	鹿嶋市	土浦市	龍ヶ崎市	筑西市	全県平均 ²⁾
本年値	7/26	7/21	7/20	7/23	7/13	7/16	7/12	7/21
平年値	7/24	7/18	7/14	7/20	7/13	7/14	7/12	7/18

1) 今後の気温が平年並みに推移した場合 (6月29日現在)

2) 表に示した地点以外も含む

水稻早生品種の斑点米カメムシ類の発生に注意しましょう！

～昨年発生の多かった地域や常発地では特に注意して下さい～

本県において斑点米カメムシ類による斑点米は、等級格下げの主要因となっています。主な加害種はクモヘリカメムシ (写真1)、イネカメムシ (写真2)、アカスジカスミカメです。

近年、県南地域を中心に発生が確認されていたイネカメムシが県内全域で発生が認められていますので注意して下さい。

斑点米カメムシ類の成虫は、水稻の出穂前は畦畔や周辺のイネ科雑草地に生息し、出穂とともに水田に侵入します。

「あきたこまち」等の早生品種の水田では、成虫の飛来が集中する恐れがあります。また、その他の品種についても周辺より出穂の早い水田では、発生に注意して下さい。

[防除対策]

- ① 水田周辺のイネ科雑草は、カメムシ類の生息場所となるので除草に努める。ただし、出穂期近くになってからの除草は、カメムシ類を水田内へ追い込むことになるので、水稻の出穂2週間前までに終わらせる。
- ② 成虫を対象とした防除適期は穂揃期である。穂揃期に成虫を確認した場合は防除を実施する。
- ③ 幼虫を対象とした防除適期は、出穂後10～15日頃(乳熟期)である。乳熟期以降の幼虫密度が高いと斑点米の発生量が多くなる。
- ④ ふ化直後の幼虫は非常に小さく、気がつかない場合があるため、水田内をよく観察する。
- ⑤ 発生量が多い地域は穂揃期と乳熟期の2回散布を検討する。
- ⑥ 防除の際には、収穫前日数や使用回数及び周辺作物(特に早生品種を作付している水田)への飛散に注意する。



写真1 クモヘリカメムシ(成虫)



写真2 イネカメムシ(成虫)

ナ シ

1. 黒星病

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在、発病果率(本年値 0.3%、平年値 0.4%)、発生地点率(本年値 37%、平年値 37%)ともに平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病した果実及び葉は第二次伝染源となるため、見つけ次第除去し、適切に処分する。
- ② 果実への感染が増える時期なので、薬剤散布は参考防除例を参考に散布間隔が空かないようにする。
- ③ 薬剤は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

2. ナシヒメシンクイ (第三世代幼虫)

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在、被害果を認めず平年並である。
- ② 4月から6月中旬までのナシヒメシンクイのフェロモントラップへの総誘殺数は、小美玉市で平年より多く、かすみがうら市、土浦市、筑西市では平年並、笠間市では平年よりやや少ない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 被害果を見つけた場合は、速やかに処分し、成虫の発生を防ぐ。
- ② 薬剤は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。
- ③ かすみがうら市、土浦市、筑西市の防除適期については、今後、病害虫防除所ホームページで情報を随時更新するので参考にする。

(次頁、防除所レポート参照)

(ナシ 続き)

防除所レポート [ナシヒメシンクイの防除適期の予測]

- ① ナシヒメシンクイ第三世代幼虫を対象とした防除適期は、**第二世代成虫の誘殺数がピークに達した日の1~2日後**である。
- ② 各地点の第二世代成虫の誘殺最盛期は、第一世代成虫のフェロモントラップへの誘殺最盛期と有効積算温度から予測した。
- ③ 今後、病害虫防除所ホームページで誘殺状況を随時更新するので参考にする。

表 調査圃場におけるナシヒメシンクイ第三世代幼虫の予測防除適期

地点	第三世代幼虫の予測防除適期 ¹⁾		
笠間市(旧友部町)	7月16日	～	7月21日
小美玉市	7月16日	～	7月21日
石岡市	7月15日	～	7月19日
かすみがうら市	7月15日	～	7月19日
土浦市	7月10日	～	7月15日
筑西市(旧下館市)	7月6日	～	7月10日
筑西市(旧関城町)	7月9日	～	7月14日

1) 第一世代成虫の誘殺最盛期を基に予測した(6月25日現在)。

果樹共通

1. チャバネアオカメムシ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月第3半旬までの予察灯への総誘殺数は、かすみがうら市で平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 夜温の上昇に伴い活動が盛んになり、果樹園への飛来が増加するので注意する。果樹園内でカメムシ類を確認した場合には、活動が鈍い早朝に薬剤散布を行う。

夏ネギ

1. 黒斑病(葉枯病を含む)

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在、発病度* (本年値 7.6、平年値 3.1) は平年よりやや高く、発生地点率 (本年値 100%、平年値 52%) は平年より高い。

※発病度：病斑をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病初期の防除に重点をおき、その後の発病状況に応じて薬剤散布を行う。
- ② 薬剤散布は、必要に応じて展着剤を加用し丁寧に行う。また、収穫前日数に十分注意する。
- ③ 薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ 肥料切れや多肥は発生を助長するため、生育状況に合わせ適切な肥培管理を行う。

水稲における紋枯病の防除対策について

近年、病害虫防除所が調査している水稲圃場において、紋枯病の発生が多い傾向にあります。紋枯病は、前年のイネの病斑上に形成された菌核が圃場にとどまり次作の伝染源となるため、毎年同じ圃場で発生しやすい傾向があります。昨年、発生が多かった圃場では特に注意して対策を行いましょう。

[特徴]

前年の被害株や畦畔等の罹病雑草に形成された菌核で越冬し、伝染源となる。菌核は代かき時に水面に浮上し、株元に漂着する。気温が上昇し、株間の湿度が高くなると、菌核から発芽した菌糸が伸長して葉鞘内に侵入し始め、楕円形病斑をつくる。本病にかかると、下葉からしだいに枯れ上がり、イネの茎が弱くなって倒伏しやすくなる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 病斑は水際に近い下部の葉鞘から現れ、次第に上位に進展するため、薬剤散布は下部の葉鞘にまでかかるように行う。
- ② 前年発生がみられた圃場では本病が発生しやすいため特に注意し、発生が認められた場合には早期に防除を行う。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
水稲	縞葉枯病	発生量:多い	6月下旬現在、県南地域の一部圃場で発生を認めている。県西地域、県南の一部地域におけるヒメトビウンカ第一世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率が、12地点中10地点で5%以上の高い値となった(令和3年6月4日発表 病害虫速報 No.2 参照)。
	ニカメイガ	発生量: 平年並 ～やや多い	6月下旬現在、平年並～やや多い発生である。フェロモントラップへの総誘殺数は、龍ヶ崎市で平年よりやや多いので、本田での発生に注意する。
	イネツトムシ	発生量: 平年並 ～やや少ない	6月下旬現在、平年並～やや少ない発生である。葉色が濃い水田では発生に注意し、発生が多い場合には、幼虫が小さいうち(葉先が巻かれ始める時期)に防除を実施する。
サツマイモ	イモキバガ	発生量: やや多い	6月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
	ナカジロシタバ	発生量: 平年並～ やや多い	6月下旬現在、平年並～やや多い発生である。
ナシ	ハダニ類	発生量: 平年並 ～やや多い	6月下旬現在、平年並～やや多い発生である。気温の上昇に伴い発生が助長されるので注意する。
ブドウ	褐斑病	発生量: 平年並	6月下旬現在、平年並の発生である。参考防除例を参考に、袋掛け前の防除を徹底する。
	晩腐病		
	べと病		
夏ネギ	さび病	発生量: 平年並	6月下旬現在、平年並の発生である。
	べと病	発生量: 平年並 ～やや少ない	6月下旬現在、平年並～やや少ない発生である。
	ネギアザミウマ	発生量: 平年並	6月下旬現在、平年並の発生である。
	ネギハモグリバエ	発生量: 平年並 ～やや少ない	6月下旬現在、平年並～やや少ない発生である。
ナス	アザミウマ類	発生量: 平年並～ やや多い	6月下旬現在、平年並～やや多い発生である。
共通害虫	オオタバコガ	発生量: やや多い	6月下旬現在、フェロモントラップへの総誘殺数は、龍ヶ崎市で平年より多く、土浦市で平年よりやや多く、銚田市で平年並～やや少ない。
	ハスモンヨトウ	発生量: -	6月下旬現在、フェロモントラップへの総誘殺数は、龍ヶ崎市で平年よりやや多く、土浦市で平年並～やや多く、銚田市で平年より少ない。

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 6月26日から7月25日)

気象庁(6月24日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	30	30	40
	降水量	関東甲信全域	20	40	40
	日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

<1週目の予報> 6月26日(土曜日)から7月2日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率50%

<2週目の予報> 7月3日(土曜日)から7月9日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

<3週目から4週目の予報> 7月10日(土曜日)から7月23日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類* (FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。